

私とフルールはいつも、相棒として街を守ってきた。  
妖精フルール。

小さな男の子の姿をした、少し生意気な男の子。  
背中には、とても綺麗な羽が生えている。

その羽をくすぐると、フルールは顔を真っ赤にして怒る。たぶん、すぐくすぐったいのだ。

それは、私だけが知っている秘密。

そんな小さなものから、もっともっと大きなものまで、私たちは、たかさんの秘密を二人で分け合っていた。

私が、フルールからセイント戦士としての力をもらったことが、その中でも一番の秘密。ケンカもたくさんしたけれど、私たちの心は、強い絆で結ばれている。

この街を襲う魔物や魔人。

その魔の手から、みんなを守る力をくれたのが、フルールだった。

どうして、私を選んだの？

そう訊いてみたことがあるけれど、フルールは照れたように話をごまかしてばかり。いつか絶対に聞き出してやろうと、私はこっそり心に決めている。

※

私がいつものように学校から帰ると、もうすっかり暗い時間になっていた。

夏の間は、おばあちゃんの家で買物を持って帰ることになっているから、どうしても遅くなってしまう。そんな私を気づかって、フルールはその間にも、代わりに町をパトロールしてくれている。

生意気だけど、とても優しいフルールが、私は好きだ。

「ただいま。フルール、いないよね」

今夜も、部屋にフルールの姿はない。

フルールのことは心から信頼しているし、戦いでは何度も助けてもらったけれど、やっぱり相棒として、友達として、すごく心配だった。

今日は特に、なんだかイヤな予感がする。

「セイント・オン！」

制服のまま部屋で変身すると、ブラウスが弾けて、聖なるコスチュームが私を包んだ。フルールのフェアリーパウダーが、部屋の窓から突然飛び込んできたのは、その時だった。

パウダーを使って、私たちは連絡を取り合っている。キラキラと輝いて、セイント戦士と妖精にしか読めない文字を宙に描いていくパウダー。

『ユキ！』

私の部屋一面に、フルールからのメッセージが浮かび上がった。

その内容に、ドクンと胸が震える。

『ユキ、大変なんだ。今すぐ学校へ来て』

それを見た私は、すぐにスカートをひるがえして、窓から夜の街へ飛び出していた。フルールが、とても心配だったから。

ざわめく胸をぎゅっと抑えながら、私は、大切な相棒のことを想った。

※

コンクリート、瓦、色とりどりの屋根を走り抜け、飛び越えて、私は進む。

セイント戦士へと姿を変えた私の、青い髪がなびいて、スカートは風に舞う。

フルール、何があったの？ お願い、無事でいて。

学校の教室はもう、闇のエネルギーで満たされていた。

夜の校舎。真っ暗で、先生も生徒も、誰もいない。

呼び出されたのは、三年二組の教室。

そこは、私がいつも通っている、友達との思い出に満ちた大切な場所だった。

変身した姿で、一気に階段を駆け上がる。

フルールの気配を、小さく感じて、見上げながら。

フルールのエネルギーは、一つの場所から動かない。

それに、この充滿した強力な闇の力は、いったい……。

異様な、良くない予感が胸に広がって、私はとにかくフルールの所へ急いだ。

ドアをスライドさせると、夏休みで使われていない机や椅子の、乾いた匂いがむっと漂ってくる。

激しい闇のエネルギー。

一番前の黒板に、ぼんやりと光る姿。妖精の男の子フルールが、手足を磔にされていた。

「フルール！」

「ユキ！来ちゃダメだ！」

嫌な予感が、確信に変わる。

やっぱり、フルールからのメッセージは、敵の罠だったのだ。

闇のエネルギーで作ったフィールドへ、私を、セイント戦士をおびき寄せさせるための罠。パトロール中だったフルールを誘拐して仕組むなんて。

なんて卑怯。

許せない気持ちで、いっばいになった。

「セイント・ユキ！ 逃げて！」

そう叫び続けるフルールに、私は優しく笑いかける。

心配なんてさせたくない。

「大丈夫だよ、フルール。こんなひどいことをした犯人なんてすぐにやつつけちゃうから、いっしょに帰ろう」

「ちがうんだ、ユキ、お願いだ、逃げて」

「どうしたの？ フルール？」

その時、教室いっばいに、大きな、低い笑い声が響きわたった。

周囲を睨んで、警戒する。

「誰？姿を現しなさい！」

私はしっかりと構えて、光のエナジーを手足に行き渡らせた。

武器に頼らない、純粋にエナジーと身体だけで戦うのが、私の、セイント・ユキのスタイル。

フルールを誘拐した卑怯な犯人。ぜったい、許さない。

ほんの何秒か。じっと、纏わりつくような沈黙があった。

夏の夜は蒸し暑くて、コスチュームの中に汗が沁みていく。

教室の中いっばいに、高まる敵のエナジー。

来る。

走る緊張。

バリバリとほとぼしる黒い閃光の中から現れたのは、全身に黒い鎧を纏った魔人だった。危険で、邪悪なオーラが撒き散らされて、教室の窓が音を立てて揺れていく。

浮かび上がった暗黒の敵。

その顔は黒い仮面に覆われて、目元の、黄色い歪んだ瞳だけがギロリと光っている。すごく不気味な視線。

「ようこそ、我がフィールドへ。セイント・ユキ」

お腹の中まで響いてくるような、低くて太い声で魔人は言った。

「魔人！ 今すぐフルールを放しなさい！」

「はっはっは」

重低音の笑い声に、身体の芯が震える。

「噂通り、気の強い女だなセイント・ユキ。どうだ、このロケーションはお気に召したかな？」

魔人は大きさに、その手を広げて私を見た。

「どういう、意味？」

嫌な予感がして、私は問う。

「はっはっは。貴様自身がよくわかっているはずだが？ セイント・ユキ」

楽しむように、黄色の視線が私を射抜いていた。

このロケーション。

三年二組。

ぞっと、背筋が凍る。

まさか。うん、そんなはずない。

魔人は私とフルールの間へ降り立ち、フルールの頭をそっと撫でるように触った。

「フルール！」

「ごめん、ユキ……」

「えっ？」

「ごめん……。この魔人は……。僕のフェアリーエナジーを分析して、ユキの……。セイント・ユキのことを暴いたんだ……」

フルールは震えながら、何度もごめんと呟いて、泣いていた。

そんな、まさか。

「はっはっは。御察しの通りだよセイント・ユキ。今夜、俺様は突き止めたのだ。真実を。セイント・ユキとは、誰なのかをな」

頭が、真っ白になった。

そんなはずない。そんな。フルールのフェアリーエナジーを解析するなんて。

それが簡単なことではないのだと、私はずっと前にフルールから教えてもらっていた。

エナジーについて教わった時のことだ。

愛のエナジーと、闇のエナジー。そして、妖精のエナジー。それぞれに、その持ち主の記憶や感情が宿っているけれど、それを他人が読むのはとても難しい。

そんなことを出来る魔人がいるなんて。

それに、そのためにはたくさんエナジーをフルールが解放しなければならぬはずだった。きつと、この魔人はフルールから無理やりエナジーを放出させたのだ。

なんて残酷で、なんて卑怯な作戦……。

許せない。

「ごめん、ユキ……」

「フルール！」

駆け寄ろうとする私へ向けて、魔人の指がすっと上がった。

昂まる闇の力。

その指から、突然、エナジーの針が撃ち出されて、私は慌てて跳び退いた。

稲妻のような、黒い残像が走る。

けれど、それは、私を狙った攻撃ではなかった。じっと指を向けたまま、笑い声を響かせる魔人。

警戒しながら、私はその指の示す方向を振り向くと、その先にあるものを見る。ドクンと、心臓が鳴った。

エナジীর針。その針が貫いているのは、コピー用紙に印刷して張り出されていた、一枚の名簿だった。

それはこのクラスの、委員会の割り振りを書いた名簿。

その中の、一つの名前を針が貫いている。

針で焼かれた、一行の文字。

『図書委員・女子、柊雪』

私の、名前だった。

※

あれから、一時間が経ったことを、教室の時計は告げていた。

汗の匂いが、教室に満ちはじめている。

「あぐ！ うぐ！」

私のコスチュームにぶつかると同時に、バリバリと黒い火花を散らす暗黒の剣。それは聖なる光を飲み込もうとする、闇のエナジীর造られた魔人の武器。

罨のフィールドの中で悠々と振舞い、笑い声を上げる魔人。

その魔人の前がっくりと膝をついた私は、まるで罪人のように両手を上げて、頭の後ろで組まされていた。

魔人の前でポーズをとるように、命じられたのだ。

膝をつけ。そして、両手を上げて組め。

全てを、人質にされて。

両親を。

友達を。

今まで関わった全ての人たちを暗黒の手中に収められて。

魔人は、この一時間で、執拗に私の背中を拷問していた。

「どうだ、セイント・ユキ」

「う！ あうう！」

背中に走るダメージに、私は何度ものけぞり、痙攣させられた。

ガクガクと身体が強張り、震える。

くやしい……。

負けたく、ないよ。

「はっはっは！ 闇に逆らいし愚かな咎人よ、思い知れ！」

「あうっ！」

「ユキ！ ああ、やめろ！ やるなら僕をやれ！」

涙に枯れたフルールの声。

大丈夫、私、負けないよフルール。

悲鳴なんて上げるものかと唇を噛んでいるけれど、それに気付いているかのように、魔人は攻撃の手を強めてきた。

「あう、う」

視界がぼやけて、私は口を開いたまま、さらに激しい痙攣を見せてしまうくやしい。見られたくない。

時々ふっと、意識が遠のく。

イヤだ。ダメ。負けるもんか。こんな、卑劣な罠に。

「抵抗ができないというのはどんな気分だ？ セイント。今や貴様の友人、肉親、全てのリストが我が手中にあるのだ」

視界のピントが合うと、薄ら笑いを浮かべた眼が、じっと私を見下ろしていた。

「少しでも妙な素ぶりを見せてみる、お前は後悔することになる」

「卑怯者……」

「はっはっは。卑怯？ これは戦略というものだ」

魔人が、嘲るように体を揺らして言う。

「愛の戦士セイント・ユキ！ さぞ愛する者も多かろう」

言葉の合間に、激しく、振り下ろされる剣。

「あう！ あぐっ！」

「守りたい者も多かろう。セイント・ユキ」

魔人の声が、笑いで上ずる。

「ん？ どうだ」

後ろに立った魔人は私の頬をぐっと掴み、無理やりに持ち上げると、フルールに見せつけてさらに笑った。

フルールが叫ぶ。

「ユキ、ごめん、ごめんね、僕のせいで、ああユキ！」

涙を流すフルールに向けて、私は、なんとか必死で微笑んで見せた。

「……フルール。大丈夫。私は、大丈夫だから」

「はっはっは。惨めだなセイント。そして妖精フルール」

それから魔人は何度も何度も、私の背中へ、その剣を全力で振り下ろした。

「どうした、抵抗してみろセイント。ただし少しでも動けば、貴様の愛する者たちを魔物に襲わせてやる」

「お願い……、私はどうなってもいい……。みんなに攻撃するのだけは、やめて……」

「はっはっは。強気なセイントが懇願したぞ」

これが、正体を知られるということなの……？

私に関わった人たちみんなが、ターゲットにされてしまう……。

背中への激痛よりも、大切な人たちを傷つけられることの方が、辛くてたまらなかった。守りたい。

友達を。

お父さんやお母さん。

家族を。

フルールを。

街のみんなを。

だからこそ、セイントになって、戦ってきたのに。

みんなが、大切だった。

愛してた。

「あううううっ」

「はっはっは。やめて、だと？」

魔人の低い声が歪む。

「何匹もの魔物を殺しておいて、正体を知られた途端にその様か。愚かな小娘め。自分の罪を思い知るがいい。貴様もまた、卑劣な、暴力の化身なのだ！」

激しく打ちつけられる剣。

傷ついた身体に、言葉が塗り込められていくような感覚。

心が、ぎゅっと締め付けられていた。

「そんな、私……、私は……」

自分もまた、暴力の化身。その言葉が、胸を斬りつけてくる。

「ユキ」

フルールの声が聞こえた。

「そんなことない！ ユキは、誰よりも優しいんだ。本当は暴力なんかふるいたくはない人なんだ。それが、僕のせいで戦って、傷ついて。それなのに……。ユキ……。本当に、ごめん、ごめんね。ユキは暴力の化身なんかじゃない。ぜんぶ僕のせいだ」

フルール……。

フルールのせいなんかじゃないって、言ってあげたかった。なのに、声が出ない。

魔人の言葉が、何度も胸に突き刺さる。  
私も、魔物と同じ……。

本当は、魔物とも解り合えたらって、いつも思ってきた。でも、そのために、私は何を  
しただろう。

結局何も出来なかった。

戦うことで、解決してきた。

暴力の、化身。

心が乱れて、聖なるエナジーが、刹那、薄まってしまった……。

それは、明確な隙になり、そして。

ザクリと音がした。視界が、霞む。

おなかが、すごく、熱い。

見下ろすと、心臓の鼓動が早まる。

後ろから、私のおなかに黒いエナジーが刺しこまれていた。剣の形のエナジーが、突き  
出す。

「あう、あ、かはっ……」

「そんな、ユキ！ うあああやめろ魔人！ ああユキ……！」  
のけぞる私。

それは、暗黒の魔人だけが使えるエナジーの技。

『絶望』を直接相手に打ち込む、ダークステイング。

「はっはっは。この強気な女の腹から突き出た我がエナジーを見ろ、妖精」

「あ、あ、フルール」

手を伸ばすと、フルールに触れられそうだった。でも、それは錯覚。

私たちの距離は、遠くて。

「ユキ！ ユキ……！」

ニッコリと、私は笑う。泣かないでフルール。お願い。

「だいすき、だよ、フルール」

「やめろ……！」

フルールの前で私は、おなかの剣を、さらに押し込まれてしまった。

「あ、かは！」

「はっはっは！絶望しろ！聖なる者たち！」

「ユキ……！」

※

夜が深まって、学校は闇に包まれていた。けれど、魔物によって作り出されたエナジールのフィールドは、教室の中をぼんやりと紫の灯りで浮かび上がらせている。暗い絶望をおなかに刺し込まれてから、私は長い時間、気絶していた。夢を、見た気がする。

心をじつとりと締め付けるような、悪夢。

灼け爛れた街を歩きながら、幼い私が泣き叫んでいた。

たくさんの人が地面に倒れていて、みんな、服を剥ぎ取られて苦しんで、転げ回って。友達も、両親も、フルールも、みんな、裸にされて。幼い私だけが、ぶかぶかのセイントのコスチュームを着て泣いている。

セイントの力は持っているのに、幼くて、何もできなくて。

みんなを助けようと泣きながら走り出すと、大きすぎるコスチュームが、肩から地面へ脱げ落ちていった……………。

※

「ユキ！ 気がついた？ ユキ！」

「う、ん、フルー、ル？」

目を開けても、頭がぼんやりとして重たい。

私の身体は、立った姿勢で床から浮き上がっていた。

身体が動かない。

ピンと上に伸ばした両腕と肩が、張りつめたように痛む。

私は、両手をまっすぐに上げさせられていた。

汗でコスチュームが肌に張りついて、息苦しい。

上を向くと、自分の腕と、手首に巻きつけられた紫のロープが天井へ伸びているのが分かった。

私は、両手を拘束され、吊るし上げられていたのだ。